

隅田川

江戸時代の都市風景

Edo - Tokyo Museum Exhibition outside
“Sumidagawa River - Edo period urban landscape”



ごあいさつ

東京都江戸東京博物館は、2022年4月より、大規模改修工事のため休館中です。昨年度、休館中の事業の一つとして、博物館同士の交流を続けてきたソウル歴史博物館にて、国際交流展「隅田川－江戸時代の都市風景」(2022年9月7日－10月23日)を開催し、好評を博しました。

本展は、ソウルでの展覧会をコンパクトにまとめ、千代田区立日比谷図書文化館にて、江戸東京を代表する河川として親しまれてきた隅田川の魅力をより丁寧に紹介する企画です。

隅田川は、江戸の人々にとって輸送の大動脈であると同時に、旧跡、寺社、行楽地を数多く抱えた名所として深く愛され、親しまれてきました。そのさまざまな風景について、当館収蔵品を中心に紹介します。また、今回は特別に千代田区の貴重な文化財のうち、紀伊国屋三谷家コレクションからも隅田川を描いた浮世絵を展示します。是非この機会に、江戸を象徴する河川である隅田川の多彩な世界をお楽しみいただくとともに、江戸の文化や生活の中に根ざした隅田川についてご堪能いただければと思います。

最後になりましたが、本展を開催するにあたり会場の利用および作品の借用に関し多大なご協力を賜りました千代田区、千代田区立日比谷図書文化館の関係各位、ならびにご協力を賜りました諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

東京都江戸東京博物館

Foreword

The Tokyo Metropolitan Edo-Tokyo Museum is temporarily closed from April 2022 for major renovations. Last year, the museum continued to make exchanges with other museums as part of its activities during the closure by organizing the international exchange exhibit “Scenes Around Sumidagawa River in Edo Tokyo” (September 7 to October 23, 2022) at the Seoul Museum of History, which received positive reviews.

The museum plans to downsize the exhibit in Seoul to more thoroughly showcase the charms of this well-known river representing Tokyo in the Hibiya Library & Museum.

The Sumidagawa River was a hub of transportation for the people of Edo and was beloved and well-known for famous places in Edo with its many historical sites, temples and shrines, and resorts. The museum’s collection will primarily showcase these different scenes. We are delighted to introduce Ukiyo-e which is a piece on Sumidagawa River from Kinokuniya Mitsui Collection, which is part of Chiyoda-word's invaluable assets. This is a good opportunity to enjoy the fascinating world of the Sumidagawa River, a symbol of the city of Edo, and appreciate how deeply rooted this river was in Edo culture and daily life.

Finally, we would like to express our sincere gratitude to everyone involved at the Hibiya Library & Museum in Chiyoda Ward, who has greatly assisted with preparing the venue for this exhibition and to the government agencies for their support.

Tokyo Metropolitan Edo-Tokyo Museum

目次

プロローグ	
隅田川にまつわる物語	6

第1章	
隅田川を眺める	16
(1) 広やかな景色を楽しむ	18
(2) 隅田川界限の名所絵	24
(3) 橋をめぐる光景	28

第2章	
隅田川の風物詩	36
(1) 春	42
(2) 夏	48
(3) 秋	56
(4) 冬	58

エピローグ	
都市東京の隅田川－江戸から東京へ	62

凡例

・本書は、千代田区立日比谷図書文化館において、2023年7月7日(金)から8月6日(日)まで開催される東京都江戸東京博物館館外展示「隅田川 - 江戸時代の都市風景」の図録である。(主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館、後援：千代田区)

・本展覧会は2022年にソウル歴史博物館(韓国)で開催された国際交流展「隅田川－江戸時代の都市風景」をもとに、新たに構成し直したものである。

・各作品のデータは、作品名、作者名、年代、技法、員数(掲載員数/全体員数)、分量、所蔵の順に記した。

・所蔵表記のないものは、東京都江戸東京博物館の所蔵である。

・各章の解説及び作品の解説の執筆は東京都江戸東京博物館学芸員・朴美姫が行った。

・P53「東都両国橋川開繁栄図」、P56「隅田川八景 待乳山秋月」は千代田区教育委員会から借用し、原版の提供を受けた。



隅田川

隅田川は江戸時代には千住大橋よりも下流、綾瀬川との合流点である鐘ヶ淵付近から河口までを流路とし、長らく荒川(入間川)の下流と位置づけられた河川である。

835年に初めて「住田河」と記録された隅田川は、江戸時代には、千住大橋より下流を「隅田川」と呼び、浅草付近は「浅草川」や「宮戸川」、両国付近は「両国川」、それより下流は「大川」などと、場所によってさまざまな名で呼ばれた。

近代に入り、法的に荒川の一部とされた隅田川は、都市化により度重なる洪水に悩まされていた。明治43年(1910年)の東京大洪水を契機に、明治44年から昭和5年(1930年)にかけ荒川放水路が開削され、昭和39年(1964年)の河川法改正により、放水路が荒川の本流に定められると、岩淵水門より下流の部分が正式に隅田川と名付けられた。

現在は、北区、足立区、荒川区の間を縫い、台東区、中央区と墨田区、江東区の境界をなして東京湾に注ぐ東京都の市街地を流れる最大の川として、多くの人々に親しまれている。

なお、本展覧会では作品名を尊重しつつ、河川名は隅田川で統一することとする。



プロローグ

Prologue



隅田川にまつわる物語

隅田川は、江戸の人々にとって伝説や物語の舞台として馴染み深い川であった。平安時代の物語である『伊勢物語』の在あり原業平のなりひらが小船に乗り、都鳥の名を聞いて京の都を思い出した川であり、浅草寺の本尊、聖しょう観かんの音のん菩ぼ薩さつ像が見つかった川でもあった。また、幼い梅若丸が川のほとりで命を落としたという、梅若丸の伝説もよく知られている。

江戸が都市として成熟するに従い、隅田川やその周辺に多くの世俗的な遊興の場や名所が誕生してくる。それにともない、描かれる世界もさまざまな展開を見せ始めるのであるが、このような物語は、江戸時代を通じて多彩なかたちで描かれ続けており、江戸の人々の深い愛着を感じ取ることができる。

Stories Around Sumidagawa River

The Sumidagawa River was a familiar river to the people of Edo as the stage of many legends and stories. It was on this river that Ariwara no Narihira from the Tales of Ise, a story from the Heian period (late 8-12th Century), embarked on a boat and heard the name Miyakodori that reminded him of Kyoto, and it was also the river where Sho Kannon Bosatsu, the principal image of Sensoji Temple was discovered. Moreover, the legend of Umewakamaru was also well-known, in which the young Umewakamaru lost his life on the bank of this river.

As Edo matured as a city, several worldly pleasure spots and famous places cropped up along the Sumidagawa River and its surrounding area. Along with these changes, the world depicted in art also began to show various developments. Throughout the Edo period, these stories continued to be depicted in various formats and evoked deep affections of the people in Edo.



『伊勢物語』と都鳥

平安時代初期の貴族、在あり原業平のなりひらと思われる人物を主人公にした『伊勢物語』は、現存する日本最古の歌物語として知られている。その中の第9段「東下り」の場面で詠まれた和歌「名にしおはばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」に隅田川の「都鳥」が登場する。都から遠く離れ、都に残してきた恋人を思う歌の内容から、隅田川の古典的な象徴として多くの絵巻や絵本などに取り上げられた。

「武州州学十二景図巻」 隅田長流

狩野尚信 慶安元年(1648)頃 紙本淡彩 1巻 27.8×1239.3

先聖殿(昌平坂学問所)から眺望した12の景色を主題にした詩に、幕府の御用絵師が絵を添えた画巻。「隅田長流」は、待まつちやま乳山とその周辺を描き、『伊勢物語』第9段目を引用する漢詩の内容から、赤いくちばしの黒い鳥は「都鳥」であると考えられる。



「隅田川百花園図」

早春梅屋敷・隅田川に富士・秋百花園

跡斎北馬 19世紀前半頃 絹本着色 3幅 各162.6×36.1

向島の庭園、百花園と隅田川をテーマに描かれた3幅対。中幅の「隅田川に富士」は、霞のかかる富士山を背景に都鳥がいる水辺の風景を描いていることから、『伊勢物語』の「東下り」を意識した隅田川上流の光景であることがわかる。





推古天皇三十六年戊子三月十八日三社権現由来

歌川国貞(3代豊国) 弘化4-嘉永5年(1847-52)頃 大判錦絵 3枚続 36.7×76.1

浅草寺の本尊となる聖観音菩薩像が、隅田川から発見されたときの様子を描く。画中の表記は若干異なるが、右から三社権現に祀られる檜前濱成、土師中知、檜前竹成の3人。水の中から光が発せられており、この網の中に観音像がかかっていることがわかる。



浅草三社権現の由来

浅草寺の本尊、聖観音菩薩像にまつわる物語。推古天皇36年(628)、檜前濱成・竹成兄弟が隅田川で漁をしていたところ、網に同じ仏像が繰り返し掛かり、不思議に思った兄弟は、郷土の文化人であった土師中知から、聖観音菩薩像であると教えられ、2人は毎日観音像に祈念するようになった。その後、土師中知は剃髪して僧となり、自宅を寺とした。これが浅草寺の始まりとされ、仏像が発見された地に建てられたのが駒形堂である。創建にかかわる3人を祀る浅草寺の「三社祭」は現在も江戸三大祭の1つとして名高い。

『江戸惣鹿子名所大全』こまかたとう

菱川師宣/画 藤田理兵衛/著 元禄3年(1690) 版本 1/2冊 11.1×16.5

江戸時代中期に刊行された名所案内書。駒形堂は浅草寺の本尊が最初に岸に上がった所とされ、馬頭観音がまつられている。隅田川の河岸に面した建造物として大切な目印であると同時に、隅田川と浅草寺をつなぐ大事な場所として認識されていた。

隅田川物「梅若伝説」

木母寺に今も伝わる隅田川の伝説。父の死にあった12歳の梅若丸が主人公で、人買い男にだまされ、武蔵と下総の境にある隅田川のほとりで病死したが、死後1年がたったある日、愛するわが子を捜し求めている母が塚の前で念仏を唄えると、梅若丸が出現して悲しみの対面を果たしたという話。後に梅若丸を哀れんだ「隅田河畔の里人」が、塚を設けて弔ったという。現在その塚が再現されている木母寺では、毎年4月15日に梅若忌が行われている。謡曲「隅田川」はこの梅若丸の伝説に取材した内容である。



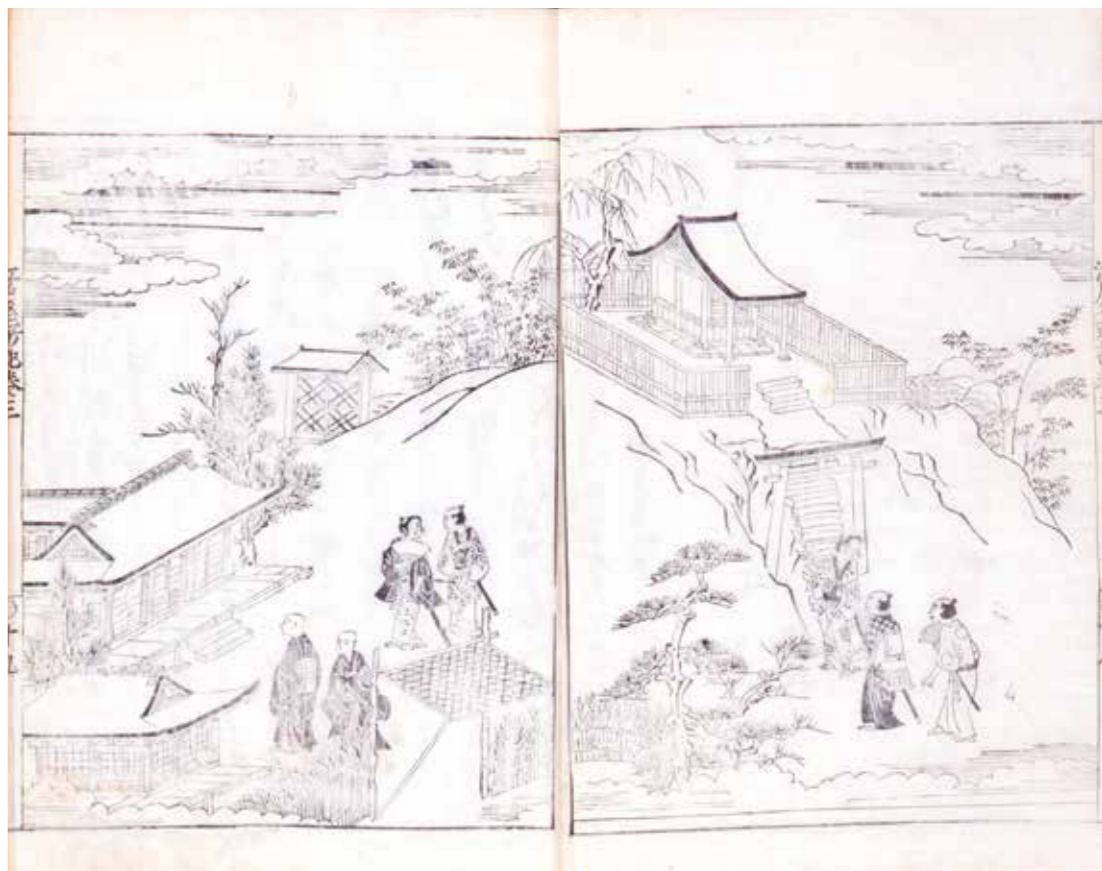
『江戸名所図 天』 梅若塚の秋

雲峯 弘化(1844-48)頃 紙本着色 1/2帖 24.3×24.5

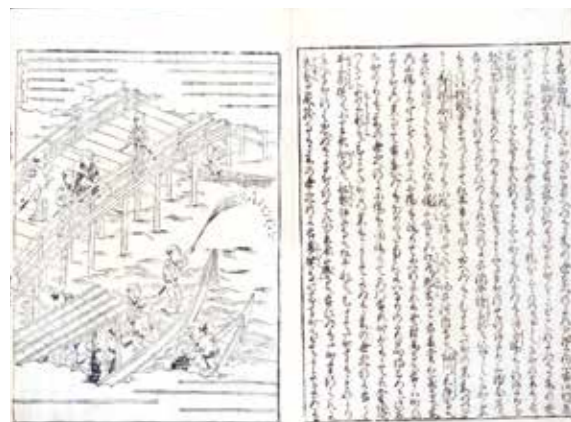
江戸の名所をさまざまに描いた画帖。「両国の夜遊」「大川橋月」「今戸の秋月」など隅田川流域も複数描かれる。「梅若塚の秋」の場面では、塚だけを大きく取りあげ、周囲の柵に役者の名前が細々と書かれる。柳の枝と月によって古典の世界へ誘うような静かな空気を感じられる。



角田川(隅田川)



角田川(隅田川)



両こくばし(両国橋)



こまかたとう(駒形堂)

『江戸雀』 角田川・両こくばし・こまかたとう

菱川師宣 / 画 近行遠通 / 編 延宝5年(1677) 版本 2/12冊 27.0×19.1

江戸で刊行された初めての江戸地誌。隅田川の流れは駒形堂とともに描かれ、「角田川」と題して描かれている挿図には川の流れてはなく木母寺と梅若塚が描かれる。隅田川を代表する名所としての、梅若塚の存在感がうかがえる。

『江戸名所記』 角田川・浅草駒形堂・三保

伝浅井了意 / 著 寛文2年(1662) 版本 2/7冊 27.0×18.3

江戸の絵入り名所案内で最も古いもの。名所81ヵ所を取り上げており、ここに描かれる隅田川関連の名所は、「浅草駒形堂」「角田川」「三保」である。「角田川」の挿図が、川の流れてはなく木母寺の梅若塚を描いている点に、隅田川と梅若伝説の深いつながりが感じられる。



浅草駒形堂



三保

第1章

Chapter 1



隅田川を眺める

高い建物などなかった江戸時代、橋の上や船から見晴らすと、遠景には富士山と筑波山を望み、近景には川岸の有名な社寺の建造物が眺められた。広々とした空間の隅田川を描いた絵画は、美しさだけではなく生活とより密接な名所が散見されるところもみどころとなる。船の存在を前提とした風景が描かれる点にも、川と船との結びつきの強さを感じられる。そして隅田川に弧を描いて架かる大きな橋は、景観のアクセントとなり、さまざまな人々が行き交う橋の上の様子は風俗画の格好の画題ともなった。

ここでは隅田川の光景がどのような切り口で描かれているのか、3つの視点に分けて紹介する。

Views of the Sumidagawa River

Looking out from a bridge or a boat in the Edo period without any tall buildings, people would search for Mount Fuji or Mount Tsukuba in the distance and gaze at the structures of famous riverside shrines and temples in the foreground. The paintings of the spacious area around the Sumidagawa River are not only aesthetically pleasing, but also allow the viewer to note the scattered attractions closely intertwined with daily life. The strong connection between the river and boats can be felt keenly in the depiction of the scenes premised on the appearance of boats. The large bridge spanning over the Sumidagawa River accentuated the landscape and the image of many different people crossing the bridge was an ideal motif for genre paintings.

This showcases the approaches taken in depicting the sights of the Sumidagawa River divided into three perspectives.



江戸一目図屏風 (複製)

歙形蕙齋(北尾政美) 文化6年(1809)
紙本着色 6曲1隻 190.8×359.7 津山郷土博物館蔵

江戸と隅田川のつながりがよくわかる江戸の景観図。遠景には富士山、そして左に江戸湾、下方に隅田川を配し、鳥になって隅田川東岸の上空から江戸の町を見渡したような俯瞰図である。実に500ヵ所以上もの名のある場所が、四季の彩りを添えて描き込まれている。

第1節 広やかな景色を楽しむ

隅田川を描く場合、富士山や筑波山を遠景に描くと一気に空間的な広がりを見せる。江戸っ子たちが信仰心と親しみを込めて眺めた山々とともに構成される画面は、市中の雑踏とは異なる江戸の空気感を伝えてくれる。

また、高い視点から描いた作品や、洋風表現を取り入れた作品にも、隅田川の広がりや、周辺の賑わいなどを効果的にまとめたものが多い。当時の人々は絵師の腕前に驚くと同時に、なれ親しんだ風景の思いも寄らぬ表情を多いに楽しんだことであろう。

Enjoying a Vast Landscape

When Mount Fuji and Mount Tsukuba are set in the background of a depiction of the Sumidagawa River, a vast space can be created in one breath. An image with these two aweinspiring but familiar mountains conveys an atmosphere of Edo, which is distinct from a crowded downtown area.

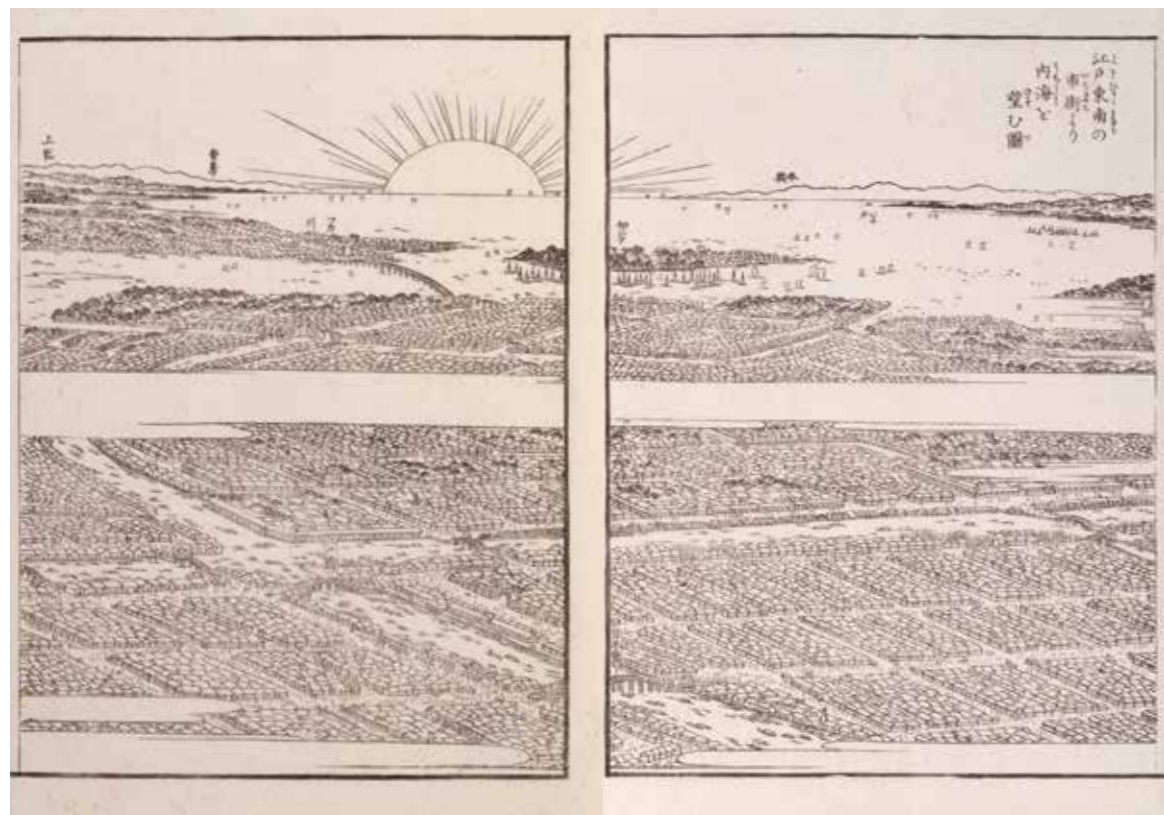
There are also a number of paintings and prints that depict the wide Sumidagawa River and its bustling surroundings from a bird's-eye view using Western painting techniques. The people of Edo were impressed by the dexterity of painters and printmakers and enjoyed new depictions of the familiar scenery.



両国橋



中洲



『江戸名所図会』

江戸東南の市街より内海を望む図

長谷川雪旦・雪堤 / 画 斎藤月岑ほか / 編 天保5年(1834) 版本 1/20冊 29.0×21.3

江戸の町名主をつとめた斎藤家3代によって書き継がれた江戸及び近郊の名所記。隅田川の景観を取り上げたおよそ40図のうち、最初に登場する本図は、江戸湾に注ぐ隅田川下流の景観を描く。雪旦は肉筆画や襖絵の下絵などにも隅田川を複数描き、隅田川の絵を得意としていたことがわかる。



隅田川

「江都名所図会」 両国橋・中洲・隅田川

鋏形蕙斎(北尾政美) 天明5年(1785) 木版 1巻 17.3×1210.2

50か所に及ぶ江戸の名所を描いた絵巻。隅田川に関しては、「両国橋」と「隅田川」、そしてこの時期に一時賑わった三侯の新地「中洲」もとりあげられている。「隅田川」は三囲神社付近から木母寺までの東岸のようすを描き、川の広々とした景観を見事に取り入れている。



隅田川風物図巻 (複製)

18世紀中頃 紙本着色(影からくり絵) 1巻 27.7×959.2

江戸城前の日本橋川を下って隅田川に合流し、木母寺付近まで隅田川をさかのぼって描いた絵巻。神田川同様、日本橋川から描く隅田川絵巻も類例がない。さらにこの絵巻は「影からくり絵」であるのも珍しく、裏から光を当てると花火や提灯の部分が明るく光る。



影からくり絵

本紙の一部を切り抜きその部分に薄い和紙を貼り、後ろから光を当てて、画面の一部を明るく輝くようにみせる細工。普通の絵が一転して夜景に変わる面白さは、見世物小屋などで楽しまれた。この絵巻の裏には、名所の名前を書いた小札が67枚貼ってある。おそらく絵巻を紙芝居のように立てて置き、くるくると画面を巻きながら、裏の小札を読み上げつつ、絵巻の前の人々に日本橋川から隅田川を船で遊覧するかのごとく見せた「影からくり絵」と考えられる。江戸の船の運行、名所、そしてからくりみる細工技術の高さなど、江戸文化の実態を知ることができる珍しい作品である。





三囲暮雪



両国夕照



待乳山夜雨

「江戸八景」 待乳山夜雨・三囲暮雪・両国夕照

歌川豊広 / 画 式亭三馬 / 序 18世紀末-19世紀初頭頃 木版 1帖 25.2×19.0

江戸の八景のうち「両国夕照」「待乳山夜雨」「三囲暮雪」の3つの場面が選ばれ、隅田川の景観がいかに愛されていたかがわかる。本図「待乳山夜雨」は、よくみると絵具を使用しないで凸凹だけをつけた、空摺による斜線で雨が表現され、淡彩で落ち着いた印象の画面に仕上がっている。



隅田川遠望図

池田孤邨 / 画 酒井抱一 / 賛 文政9年(1826) 絹本淡彩 1幅 140.0×147.6

画面右下に少しのぞいている鳥居は三囲神社のもの。湾曲した東岸が右に続き、中景には今戸橋を中心にした西岸のようすが広がる。木々の間には待乳山聖天や浅草寺の五重塔がみえる。遠景には富士山と筑波山が並んでいる。池田孤邨の師、酒井抱一が賛を寄せている。

【賛文】

是歳丙戌冬十一月、桐生の竹溪、貞助・周二の二子をともなひ、墨水に舟を泛。夕日の斜ならんとするに、猶、綾瀬に逆のほり、舟中佳肴有、美酒有り。網を挙げは、巨口細鱗の魚を得、陸を招けは、蘭陵葡萄酒の酒、傍に来る。嗚呼、吾都会の楽み、何ぞ蘇子が赤壁の遊びに異ならんや。富士有、筑波あり。観音精舎のかねの声は、漣波に響き、今戸の瓦やく煙、水鳥の魚鱗鶴翼に飛廻るは筆頭に尽がたきを、門人孤邨が一紙のうちに写して、予に「此遊びを記せよ」とゆふ。予、その日の逍遙にもれたるも不慢なから、其意にまかせて、俳諧の一句を吐く。くれぬ間に月は懸れり冬木立

抱一漫題 朱文扇印「雨華庵」 朱文瓢印「文詮」

第2節 隅田川界隈の名所絵

隅田川の周辺には数多くの名所がある。江戸が発展するに伴い、流域の名所として認識される場所は増えたが、初期はそのほとんどが寺社であった。やがて年中行事が庶民生活に溶け込んでいくと、人々の行動範囲が広がり、江戸の名所も多様化していった。その中には、今戸の瓦窯^{かわらがま}から立ち上がる煙や一時期だけ存在した埋立地の中洲など少し変わった場所から、首尾の松や船から眺める三囲神社^{みつめぐり}の鳥居の頭など一層面白味が増す景色もある。ここでは数ある隅田川の名所の中からおよそ5ヶ所を取り上げ紹介する。

Paintings of Attractions near the Sumidagawa River

There are various attractions near the Sumidagawa River. In the early Edo period, Buddhist temples and Shint shrines were the most famous spots to visit. As the city gradually developed and the scope of people's activities widened, however, annual events hosted by the family of the Japanese Emperor and samurai families came to permeate the daily lives of the common people, leading to diversification among attractions. Some were unusual, such as the Nakasu entertainment district, that was built on landfill in the center of the river and only existed for a short period, or the smoke that rose from the tile kilns a Imado; other sight, such as the Shubi-no-matsu pine tree or the top of the torii gateway leading to Mimeguri Shrine were famous for the interesting appearance they presented to boats on the river. This section introduces spots of the many attractions around the Sumidagawa River.



名所江戸百景 隅田川水神の森真崎

歌川広重 安政3年(1856) 大判錦絵 1枚 36.0×24.4

画面手前に大きく描かれた美しい八重桜の花が、ひと味違った春の隅田川風景を作り上げている。右下に見えるのは水難・火難除けで知られた水神社で、隅田川神社とも呼ばれた。遠景の筑波山は本来この角度からは見えないので景色を再構成していることが考えられる。



名所江戸百景

真崎辺より水神の森内川関屋の里を見る図

歌川広重 安政4年(1857) 大判錦絵 1枚 36.0×24.4

真崎稲荷神社付近から対岸の水神の森を円窓から眺める。遠景には筑波山がそびえ、その下には関屋の里が広がる。名物であった豆腐田楽をだす料理茶屋が真崎稲荷神社の付近に多く並んでいたことから、本図もそのような店から眺めた情景であると思われる。



名所江戸百景 墨田河橋場の渡かわら竈

歌川広重 安政4年(1857) 大判錦絵 1枚 36.0×24.4

隅田川西側の今戸界隈の岸辺に並んでいた今戸焼の窯^{かわら}を手前に、渡^{わた}の船と上流の風景、そして筑波山を遠景に描く。達磨^{だるま}をゆるやかにしたような窯の独特な形と、そこから立ちのぼる煙が、いかに隅田川の名所、さらには江戸の名所として親しまれていた様子がわかる。



名所江戸百景 真乳山山谷堀夜景

歌川広重 安政4年(1857) 大判錦絵 1枚 36.0×24.4

提灯を頼りに夜の隅田川を歩く芸者。向島・三囲神社近くの墨堤から西岸を望む風景で、対岸には待乳山、その右下に山谷堀に架かる今戸橋と明かりの灯った料理茶屋が見える。川面には星空が映りこみ、幻想的な雰囲気醸しだしている。



名所江戸百景 浅草川首尾の松御厩河岸

歌川広重 安政3年(1856) 大判錦絵 1枚 36.0×24.4

松の枝が下がる川面に、一艘の舟が泊まっている。星空の美しい遠景には御厩河岸の渡しと東岸の下流風景や行き交う渡し船などが描かれ、吉原通いの船の目印になっていた首尾の松が隅田川の名所として広く理解されていたことがわかる。



第3節 橋をめぐる光景

現在、隅田川には27本の橋が架けられているが、はじめは千住大橋(1594年)のみであった。その後しばらく橋は架けられず、移動や運搬は渡し船に頼っていた。しかし、1657年の明暦の大火で下流部に橋がなかったことによって被害を大きくしたことを教訓とした幕府は、まずは両国橋(1659年あるいは1661年)、続いて新大橋(1693年)、永代橋(1698年)を架橋した。さらに1774年には住民が主体となって大川橋(吾妻橋)が架けられ、5つの橋で兩岸が結ばれた。また、隅田川には多数の小さな川が流れ込んでいたことから、それらにも各々橋が架かり、交通量が少ない場所には「渡し」が設置された。ここでは人々の生活を支えた隅田川の橋について紹介する。

Scenery with a Bridge

Until the early Edo period, the Senju-ohashi Bridge built in 1594 in the upper reaches of the Sumidagawa River, was the only bridge over the river. When the lack of bridges in the lower reaches, however, caused catastrophic loss of life during the Great Fire of Meireki, the Tokugawa shogunate constructed a series of bridges: Ryogokubashi Bridge in 1659 or 1661, Shin-ohashi Bridge in 1693, and Eitaibashi Bridge in 1698. In 1774, residents of Edo demanded the construction of Okawabashi Bridge, which was later renamed Azumabashi Bridge.

There were eventually five bridges across the Sumidagawa River during the Edo period. This sub-section of the exhibition explores the bridges that supported the lives of the people of Edo.

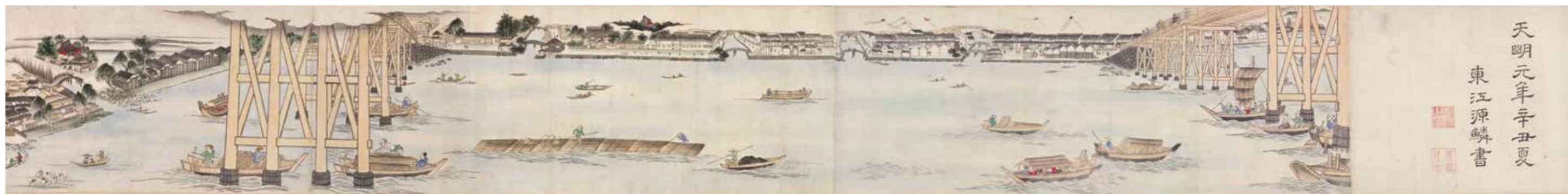


江戸名所一覽双六

歌川広重(2代) 万延元年(1860) 木版 1枚 72.5×72.1

江戸の名所を巡ってコマを進める絵双六。背景には富士山がそびえ、江戸の発展とともに注目度が上がっていた隅田川の東岸にも画面を割き、成熟した江戸の町々が広がる。隅田川には両国橋、新大橋、永代橋、吾妻橋が架けられ人々の生活を支えていた様子がわかる。



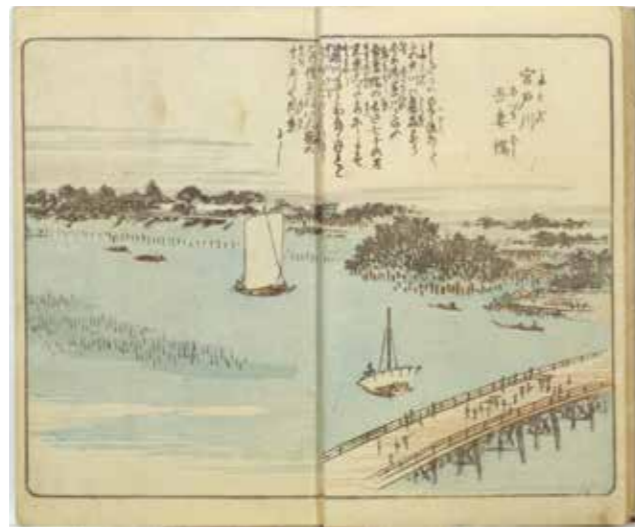


隅田川兩岸一覽（上巻）
 鶴岡蘆水 天明元年(1781) 木版 1/2巻 26.1×855.5

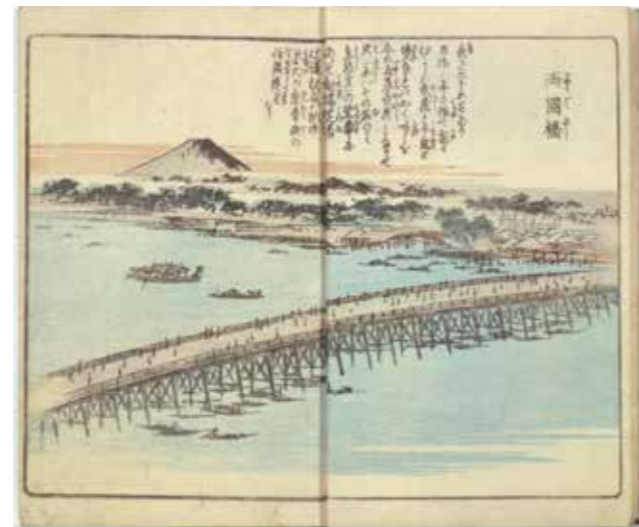
隅田川の東岸と西岸を2巻に分けて描いた絵巻。東岸(上巻)は、下流から凧があがる正月風景の永代橋から始まり、夏の日中を描いた両国橋、そして紅葉の風景が続き、雪景色の千住大橋で終わる。大胆な橋の表現が魅力的で、橋を船上から見上げるような構図が独創的である。



千住川大橋



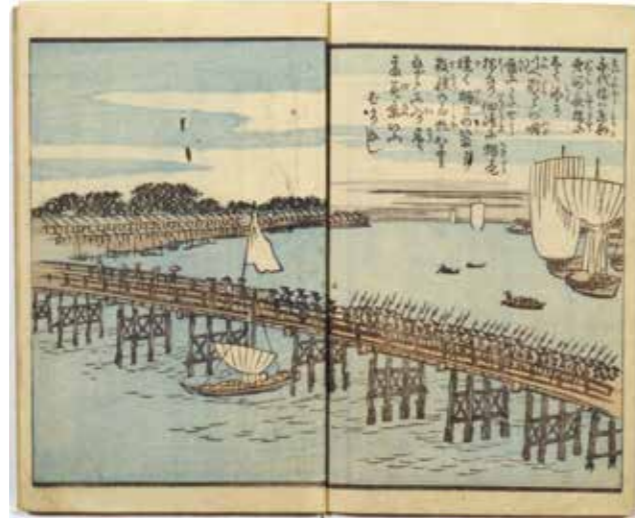
官戸川吾妻橋



両国橋



新大橋、萬年橋正木の社



永代橋



両国の晩景



『絵本江戸土産』

歌川広重(初代・2代) 嘉永3-慶応3年(1850-67)頃 版本 10冊 18.2×12.2

江戸市中及び近郊の名所、名店、名物など描き、簡単な解説を添えた観光案内書。初編から7編は初代広重が、8から10編は2代広重が手がけたとされ、松亭金水が解説を記した。隅田川については流域を代表する名所と川に架けられていた5つの橋が全て紹介されている。

日光御街道千住宿日本無類楠橋杭之風景本願寺行粧之図

橋本貞秀 慶応元年(1865) 大判錦絵 3枚続 37.0×75.0

徳川家康250回忌に本願寺法主嚴如・現如両上人の一行が日光参詣のために、千住大橋を渡る様子を描いたもの。隅田川の最上流に架けられた千住大橋は、日光道中の道筋にあり、江戸の北の玄関口で、日光社詣・諸大名の参勤交代などの重要な交通路であった。



安政乙卯十一月廿三日両国橋渡初之図

歌川国芳 安政2年(1855) 大判錦絵 3枚続 36.3×75.1

橋を新しく架け替えたときの渡り初めは、3代続く夫婦が行う習わしがある。画中の記載によれば、85歳の弥左衛門を筆頭に、0歳の曾孫が両国橋を渡っている。新しい橋が架かり、渡り初めに選ばれるということは、一家にとって大変名誉な喜ばしいことであった。



身延山朝詣群集新大橋の景

歌川広重(2代) 文久3年(1863) 大判錦絵 3枚続 36.2×74.7

両国橋・永代橋とともに「三橋」として江戸市民に親しまれた新大橋を背景に、日蓮宗総本山、身延山久遠寺へ参詣する集団の「講中」が、練物をもって橋を渡る図。花や人形などで豪華な装飾が施されたさまざまな練物がずらりと並ぶ景観が見事に描かれる。

第2章

Chapter 2



隅田川の風物詩

江戸の人々は、四季の移り変わりに心を寄せ、春の花見、夏の涼み船、秋の月見、紅葉狩り、冬の雪見といった行楽や、寺社の祭礼、雛祭り、七夕などの年中行事を大事にした生活を送っていた。その中で「江戸名所」として親しまれていた場所の多くも、名所として最も魅力を発揮する季節を持つようになり、やがて絵も、その季節を描くことが多くなった。隅田川周辺の名所にも、このような傾向がうかがえる。しかしそれぞれの季節で好まれる場所がある一方、秋については、わずかに待乳山や佃島が秋の風景として描かれる例があるものの、定番となる場所ははっきりしていない。

いずれにせよ季節感あふれる作例が、隅田川を描いた絵の「華」であることは間違いない。ここでは複数の季節を盛り込んだものをあげ、さらに四季別に、季節感のある絵を紹介する。

Seasonal Views of Sumidagawa River

The people of Edo paid close attention to the changing of the four seasons and spent their lives cherishing year-round events, such as hanami (flower viewing) in spring, summer pleasure boats, moon viewing in autumn, autumn leaves viewing, outings to enjoy the snow in winter, festivals at shrines and temples, Hina Matsuri (Doll Festival), and Tanabata (star) festival. Many familiar spots were famous for these events where people would wait for the season to unfurl the exceptional charms of these locals, and before long many art works depicted the seasons there. This trend is evident in the famous places around the Sumidagawa River. While there are places to enjoy each season, there is no clearly ubiquitous place for autumn, despite a few examples of Matsuchiyama Hill and Tsukudajima being depicted with the autumn scenery.

“Flowers” is without a doubt the classic example of artwork eliciting the feeling of the season at the Sumidagawa River. This incorporates multiple seasons and showcases seasonal paintings for each of the four seasons.



両国納涼



良夜墨水看月



隅田川看雪



墨田川堤看花

『東都歳事記』 墨田川堤看花・両国納涼・良夜墨水看月・隅田川看雪

長谷川雪且 / 画 斎藤月岑 / 著 天保9年(1838) 版本 4/5冊 22.5×15.7

江戸と江戸近郊の年中行事をまとめた版本で、多数の挿絵を盛り込みながら幕府、寺社、庶民の行事を紹介する。ここでは隅田川を描いた挿絵に注目する。隅田川を舞台に繰り広げられた四季折々の江戸の生活や、四季それぞれに愛された隅田川の様子がよくわかる。



江戸名所図屏風

17世紀末頃 紙本着色 10曲1隻 66.5×376.0

浅草寺を中央に隅田川と寛永寺が描かれる。画面には四季が盛り込まれており、春は桜の寛永寺、夏は花火と納涼舟の両国界限、秋は紅葉の亀戸天神と木母寺、そして冬が寛永寺の背後の雪山となっている。春の上野、夏の両国というイメージが明確に打ち出されている。



上巻

中巻

下巻

『絵本隅田川兩岸一覽』

葛飾北斎 19世紀初頃 版本 3冊 26.3×18.0

見開きの画面が、次の見開き画面へと絵柄がつながっていく構成をとり、隅田川を下流から上流に向けて描いたもの。東岸を遠くに眺めつつ、西岸の様子を画面に大きくとらえている。画面手前の西岸の描写は、とりわけ生き生きとした人物表現が魅力的である。

第1節 春

隅田川の春といえば「花見」である。現在のように桜を鑑賞する「花見」として広まったのは、平安時代の貴族の行事が起源とされ、鎌倉時代になると、武士の間にも広がり、屋敷や寺社の境内、山野にある一本の桜の名木を鑑賞するようになった。庶民が盛んに花見を楽しむようになったのは、江戸時代の寛文年間の頃といわれ、桜を眺めて楽しむだけではなく、桜の木の下で弁当を食べたり、酒を飲んだりとその行楽の様子を描くものも多く残される。ここでは隅田川流域で花見を楽しむ人々の華やかな姿を紹介する。

Spring

Spring along the Sumidagawa River was marked by cherry blossom viewing. Cherry blossoms began to be considered an object of appreciation during the Heian period (late 8-12th Century). In the Kamakura period (12-14th Century), flower viewing was particularly enjoyed among the samurai class. By the early Edo period (middle 17th Century), even the common people had come to enjoy viewing cherry blossoms. Edo people viewing cherry blossoms in spring were captured in a number of paintings and prints. Here, colorful images of cherry blossom viewing on the Sumidagawa River during the Edo period are being exhibited.



隅田川東岸花見図

歌川国貞(3代豊国) 文化-天保期(1804-43)頃 絹本着色 1幅 66.5×126.2

隅田川から眺めた鳥居が印象的な、東岸の三囲神社^{みめぐり}社界隈の花見の光景。堤から降りて鳥居をくぐり、松と桜が並ぶ参道を右に進むと本社がある。中景は牛御前社と弘福寺。生き生きとした人物描写が魅力的で、江戸指折りの桜の名所の楽しさが伝わってくる作品である。





『絵本東童郎』 三月木母寺参り 梅若山王

歌川豊広 / 画 南仙笑楚満人 / 戯言 文化元年(1804) 版本 1/2冊
21.5×15.9

江戸の人々が参詣した寺社や信仰の場を、月毎に当てはめて描く。ここで紹介する3月は3月15日の梅若忌の参詣を描いたものである。参詣客らしい画面手前の5人が、それぞれに目的地の東岸を眺めたり指差したりしているところに、彼らの楽しげな心持が察せられる。



『江戸名所花暦』 隅田川

長谷川雪旦 / 画 岡山鳥 / 著 文政10年(1827) 版本 3冊 26.0×17.7

植物の開花などに合わせて春夏秋冬の江戸の名所を紹介したもの。堤沿いに桜が咲き乱れ、茶店が並び、人々が大勢に行き交う様子が簡素に描かれる。詩歌を添えているのは、儒学者として知られた亀田鵬斎と、国学者、書歌人として知られた加藤千蔭で、どちらも江戸で著名な文化人であった。



隅田川花見

歌川国芳 弘化-嘉永期(1844-53)頃 大判錦絵 3枚続 36.3×73.0

三囲神社の鳥居を画面手前の下部に長くあしらった構図が大胆に描かれる。対岸の中央には待乳山聖天、右には吉原に通じる山谷堀、左には浅草界隈も描かれる。娘達の髪や傘には桜を模したようなお揃いの簪や飾りをつけ、華やかな花見のスタイルをよく表している。



向ふ鷺乃夜桜

歌川国貞(3代豊国) 万延元年(1860) 大判錦絵 3枚続 35.8×75.0

画面いっぱいに咲き誇る大きな桜の木を配し、3人の美人を描く。夜桜を見物に東岸をそぞろ歩く芸者たちと川に船を浮かべて楽しむ人々も見える。桜といえば上野が有名であったが、夜桜見物は禁止されていた。向島は、隅田川堤の夜桜の名所として親しまれた。

第2節 夏

江戸っ子の夏は隅田川の花火に始まる。花火は江戸の夏を彩る最大の風物詩であった。両国では、1733年以降、川開きと定められた5月28日(旧暦)に花火が打ち上げられ、8月28日までの3ヶ月間、夏の花火や納涼の場所として人気を博した。後に東西の橋詰に茶店や見世物が立ち並ぶようになると、江戸でも屈指の盛り場となった。

夏の両国橋界隈の賑わいを描く錦絵は、特に江戸後期に量産され、その質、量ともに他を圧倒するものがある。またその一方、喧騒を離れた穏やかな納涼風景も多数描かれており、江戸時代の夏の宵がしのばれる。

Summer

Summer in Edo began with fireworks over the Sumidagawa River. Fireworks were among the greatest spectacles that embroidered the summer of Edo. Ryogoku on the eastern riverbank of the Sumidagawa River was a popular place for enjoying summer fireworks and cool breezes. Starting with an annual fireworks festival which was a sign of the beginning of summer on the twenty-eighth day of the fifth lunar month, the Ryogoku area was packed with people over the next three months. Colorful woodblock prints (Ukiyo-e) made in the late Edo period often depict crowded scenes around the Ryogokubashi Bridge in summer and calm moments of cooling off in the river breeze on a summer night.



両国川遊図屏風

18世紀末-19世紀初頃 紙本着色 6曲1隻/1双 55.5×209.0

上野と両国橋界隈の賑わいを描いた屏風のうち、右隻にあたる「両国川遊図」。隅田川には珍しい舟舞台で若衆踊りが行われており、それを見物する屋形船と、客に飲食を提供するための舟が舞台を囲んでいる。鯛や蛸などの食材で調理をする様子も詳細に描かれ、当時の食事情もうかがえる。



東都両国ばし夏景色

橋本貞秀 安政6年(1859) 大判錦絵 3枚続 36.6×73.6

びっしりと人で埋め尽くされた両国橋を中心に、花火の上がる夜の隅田川の光景を西側上空から描く。極端に歪曲した川の表現が、画面全体を魚眼レンズで覗いたような錯覚に陥らせ、圧倒的なパワーを感じさせる作品。赤い短冊には地名や橋、花火の名称までが書かれている。



江戸両国橋夕涼大花火之図

歌川国虎 文化-天保(1804-43)頃 大判錦絵 3枚続 35.0×73.8

花火の日に両国橋西詰に並ぶさまざまな床見世を描く。中央右よりには水売り、その左に飴売り、さらに端には西瓜などの水菓子(果物)売りが見える。橋の上は花火見物の群衆でごったがえし、川には提灯を下げた屋形船など、大小の船が繰り出している。



東都名所四季之内 両国夜陰光景

歌川国貞(3代豊国) 嘉永6年(1853) 大判錦絵 3枚続 36.2×74.8

人が行き交う両国橋のシルエットを遠景に、料亭で納涼の宴を催す女性たち。中央の藍の算盤縞のような着物を着た女性と、左の弁慶縞の女性は、三味線に合わせて拳遊びをしている。白玉の入った大鉢と肴が盛りつけられた皿、盃洗の藍染め模様がいかに涼しげである。



東都両国橋川開繁栄図

歌川国貞(3代豊国) 安政5年(1858)
大判錦絵 3枚続 37.2×76.5 千代田区教育委員会寄託(千代田区指定文化財)

隅田川には屋形船をはじめとする多くの船がひしめき合い、画面中央には飲食物を販売するうろうろ船の「あたりや」が見える。船では瓜、西瓜、とうもろこしなどが販売されている。右側には大型の屋形船「川一丸」が一段と華やかに描かれ、江戸っ子が待ちわびる両国橋の川開きの様子がうかがえる。



両国橋夕涼花火見物之図（影からくり絵）

19世紀頃 紙本着色 1枚 26.5×29.3

花火で賑わう両国橋界隈を描いたこの作品も「影からくり絵」。後ろから光を当てると花火や船、家々の窓が明るくなり、空には満月が浮かぶ仕掛けになっている。地平線を低く取った遠近法が使われおり、両国橋や下流の新大橋も描かれている。



名所江戸百景 両国花火

歌川広重 安政5年(1858) 大判錦絵 1枚 36.0×24.4

「名所江戸百景」シリーズのひとつ。縦長の画面に打ちあがる花火を効果的に配した印象深い作品である。柳橋から南東を望む眺めは料亭からのものだろうか。夜空に大きく弧を描く光。星のごとくはじける玉。照らし出された川面には、屋形船の明かりが浮かぶ。



東都名所 両国繁栄河開之図

歌川国郷 嘉永6年(1853) 大判錦絵 3枚続 35.9×74.3

両国橋西詰の賑わいぶりを俯瞰して描いた図。両国橋を西に渡ると、見物小屋が林立する中を吉川町へと抜ける。近景の画面右では血気はやる若い者のけんか騒ぎ、中央では西瓜や提灯売りなどの露店が商い、描写も細かく眺めていて飽きない作品である。

第3節 秋

江戸の秋の楽しみに「月見」という行事がある。月見は、古代中国で行われていた月見の宴が日本に伝わったもので、平安時代に貴族の間に取り入れられ、十五夜(旧暦8月15日)の月を眺めて詩歌を詠む月見の宴が開かれた。その後、室町時代になると酒宴が開かれるようになり、江戸時代には庶民の間へと広がった。1年中夜空に輝く月だが、中秋の名月とされる「十五夜」、「十三夜」(旧暦9月13日)の月は特別で、これを眺めることが江戸っ子にとって楽しみな行事でもあった。

また、古くから秋を感じるものとして「秋の七草」がある。秋を代表するものとされる7種の草花のことで、『万葉集』に日本の代表的な秋草が詠まれたことに始まる。秋草を眺めながら短歌や俳句を詠むことが古来より行われ、江戸時代にも鑑賞の対象として愛されてきた。

Autumn

A popular autumn activity in Edo was moon viewing. The custom of moon viewing has its roots in banquets held by the nobility during the Heian period and continued to be observed by commoners during the Edo period. People followed this custom, particularly on the night of the fifteenth day of the eighth lunar month when the so-called harvest moon rose, and also on the night of the thirteenth day of the ninth lunar month. Seven autumn plants representing autumn were first depicted in Man'yōshū (万葉集, Collection of Ten Thousand Leaves), anthology of waka (和歌), short Japanese poems with 31 letters) poems written in the Nara period (8th Century). They were beloved as an object of appreciation during the Edo period.



東都名所年中行事

八月 向じま花屋敷秋の花ぞの

歌川広重 安政元年(1854) 大判錦絵 1枚 35.7×24.7

花屋敷内に設けられた茶屋から秋の七草を眺める女性2人を描く。右側の座敷には「隅田川焼」の徳利、猪口、都鳥をかたどった焼物が置かれる。隅田川焼は隅田川周辺の土を使った焼物で、主に都鳥の絵を描いた器や香合が作られ、お土産として売られた。



隅田川八景 待乳山秋月

歌川広重(2代) 文久元年(1861)

木版 1帖 37.3×25.0 千代田区教育委員会寄託(千代田区指定文化財)

隅田川の名所8図のうち「待乳山」の図。満月を背景に雁が群れをなして渡ってゆく場面には、待乳山を大きくとらえ、対岸には三囲神社の鳥居がうっすらと見える。待乳山は浅草寺北東に位置し、隅田川に臨み、竹屋の渡しにほど近い小さな丘で、江戸時代は月見の名所としても知られた。



隅田川三美人図

歌川国貞(3代豊国) 安政元年(1854) 大判錦絵 3枚続 37.3×77.1

隅田川の流れと三囲神社を望む東岸を背景に、高級料亭「大七」を描く。地味ながら粋な装いを凝らした3人の女性。中央の女性が団扇を持っていることから、まだ暑さが残る月見のようだが、美しく染まった楓が灯籠の光に色鮮やかに描かれ、秋の風情を感じさせる。

第4節 冬

日本には四季折々の風雅な眺めを称する「雪月花」という言葉があるように、冬は「雪看」という行事があった。雪看は月見と同じように、雪景色をながめながら楽しむことで、宮中や將軍家では雪見の宴などが開かれた。

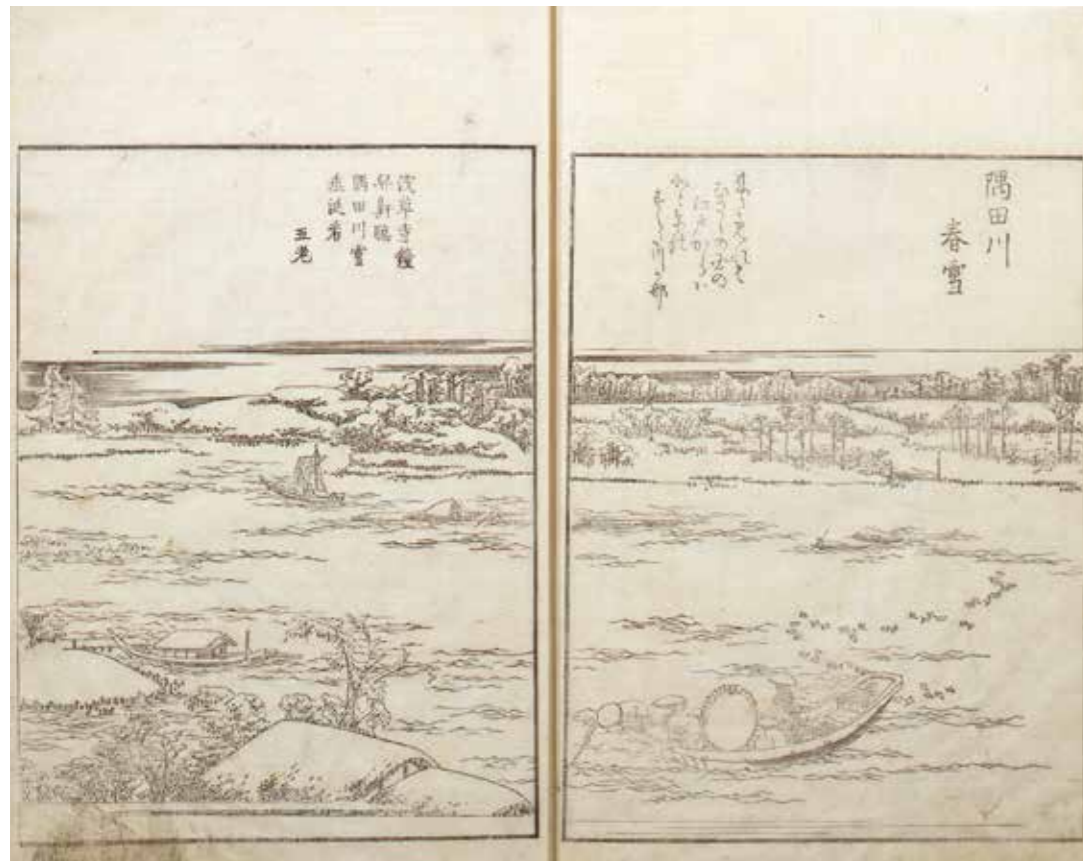
江戸では隅田川の向島付近の三囲神社、隅田川堤、そして対岸の待乳山や真崎など、主に隅田川の上流が雪看の名所として知られた。特に、炬燵や行火を置いた屋形船に乗り、隅田川を下りながら酒を楽しむ「雪見船」は冬の粋な遊びとして、文化人の中でも人気があった。

また浅草寺の「歳市の」と「糞市」は年末の恒例行事として賑わい、浅草寺の雪景色の中で描かれることも多い。

Winter

The Japanese word “setsugetsuka (雪月花)” refers to the beauty of the four seasons, including winter snow, the autumn moon, and spring flowers. There were famous spots for snow viewing in winter along the upper reaches of the Sumidagawa River.

People of Edo enjoyed snow viewing while riding on the Sumidagawa River in a boat called a yukimibune (雪見船) equipped with a heating device. Along with the snowy landscape, a bustling year-end market at Sensoji Temple was often featured as subject matter for winter-themed paintings and prints.



『東遊』隅田川春雪

葛飾北斎 / 画 浅草市人 / 撰 寛政11年(1799) 版本 1冊 25.9×17.8

江戸の名所や風俗などが挿図に描かれた墨摺の狂歌絵本。「隅田川春雪」は隅田川の雪景色で、真崎稲荷に近い橋場の渡の近くから東岸を描いていると思われる。川を行く船の客達の傘にも雪が積もっており、船の行く手には鳥が群れ飛ぶ寂しげな風景となっている。



東都名所遊観 極月浅草市

歌川国貞(3代豊国) 天保14-弘化4年(1843-47)頃 大判錦絵 3枚 36.5×75.3

降雪の浅草寺を背景に、浅草歳市に出かけた女性と子供、奉行人を描いている。歳市は年末に正月用品を商う市のこと、火吹竹、貝杓子などの生活用品も見られる。また、流行のおたふく面をかぶる子供もおり、歳市の買い物帰りの様子を捉えたものであることがうかがえる。



江戸名所四季の眺 隅田川雪中の図

歌川広重 弘化元～嘉永6年(1844～53)頃 大判錦絵 3枚続 37.0×75.6

雪の日の竹屋の渡。左手に料亭の建物が見え、川面で屋根船や筏が行き交う様子が、川幅の広さを感じさせる。しかし、3枚続の内右2枚の主題は、渡で船を乗り降りする3人の女性であろう。風景画の要素を取り入れた、情緒ある美人画である。



江都新大橋雪乃朝夕子供遊の図

歌川貞虎 天保期(1830～43)頃 大判錦絵 3枚続 36.0×78.0

新大橋近くの岸辺で雪遊びをする子供たちの姿を、朝焼けに映える筑波山と富士山を背に描く。背景の新大橋から菖蒲河岸、中洲にかけての地域は、隅田川が大きく湾曲する場所に大名屋敷が立ち並んでいた。遠近法を用いて、その複雑な地形を巧みに画面に収めている。

エピローグ

Epilogue

都市東京の隅田川－江戸から東京へ

江戸幕府が終焉を迎え、時代が明治になると、非常に大きな変化が訪れた。いわゆる「文明開化」である。しかし都市風景や庶民の日々の生活、人々の感性までもが、急に全て変わったわけではない。絵画に目を向けると、描かれる隅田川は、明治という時代を通じて、徐々に注目する場所や事象を変化させていき、表現の技術も変わっていった。

大正頃になると、版画では、画家が絵、彫り、摺りを全て自分で行う創作版画と、伝統的な分業制作を復活させた新版画が盛んになった。そしてさらに1923年の関東大震災後の復興計画によって、隅田川には復興橋と呼ばれる橋が次々と架けられ、隅田川の景観そのものも大きく変わった。隅田川の橋もおおいに注目を集めたこともあり、当時、多くの画家が都市化の進む東京を描いた。

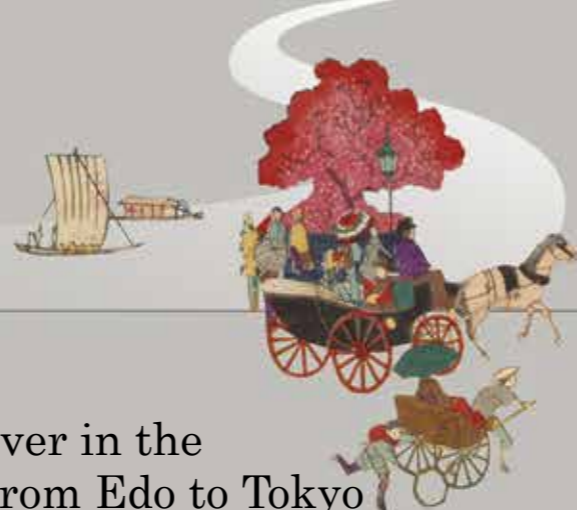
現在、隅田川に架かるモダンな美しい姿は、テレビや映画などにも数多く登場し、東京風景を語る上で欠くことのできない存在となっている。

Sumidagawa River in the City of Tokyo—From Edo to Tokyo

As the Edo Shogunate came to an end and Japan entered the Meiji period, the country underwent drastic changes. This is the so-called ‘civilization and enlightenment’. However, not all aspects of the urban landscape, daily life of the common people, let alone the sensibilities of the people changed overnight. Looking at the paintings of the time, the depicted Sumidagawa River gradually transformed the noteworthy places and events during the Meiji period, and the techniques used to express this also changed.

By the Taisho period (1912-1926), two new types of woodblock printing became popular: *sosaku hanga* (creative print), in which the artists painted, carved and printed everything themselves, and *shin-hanga* (new print), that revitalized the traditional forms of specialized production. Then, after the Great Kanto Earthquake in 1923, so-called revitalized bridges were built across the Sumidagawa River one after another based on the modern city reconstruction plan, which drastically changed the landscape of the Sumidagawa River. The bridges on the Sumidagawa River garnered a lot of attention and at that time, many artists painted the urbanization of Tokyo.

Currently, the exquisite and modern images of the revitalized bridges across the Sumidagawa River often appear in television shows and films and have become an integral part of the landscape of Tokyo.



新規造掛永代橋往来繁華佃海沖遠望之図

歌川国政(5代) 明治8年(1875) 大判錦絵 3枚続 37.0×72.9

永代橋の西岸から佃島のある河口を望む。全体的な景観は江戸時代の名所絵と同じものであるが、描かれている対象からは文明開化の訪れが十分感じ取れる。例えば永代橋は西洋型の橋に架け替えられ、河口には蒸気船と思われる黒い船が浮かんでいるのがみえる。



東京名所吾妻橋向寫真景

小林幾英 明治21年(1888) 大判錦絵 3枚続 36.1×72.8

1887年、隅田川で最初に架けられた鉄橋となる吾妻橋を中心に描く。箱形トラス橋といわれるタイプで、隅田川初の鉄橋として数多く描かれた。背景の桜が並ぶ東岸の風景は江戸時代の面影を残し、上流には筑波山の姿もみえる。



東京名所 両国橋之夕色

葛西虎次郎 明治43年(1910) 石版 1枚 38.8×53.0

両国橋の上流東岸の、通称「百本杭」の辺りから、鉄橋となった両国橋を眺めている図。空は夕焼けに染まり、人々は夕日の中を散歩したり、釣りをしたりしている。文明開化期の興奮状態が遠くなったことを示すような、おだやかな世界が広がっている。



隅田公園

織田一磨 昭和5年(1930) 木版 1枚 25.8×35.4

隅田公園から関東大震災後に架けられた言問橋を眺めた図。空は夕焼けに染まり、街灯も明るく見え始める頃、たくさんの人々が夕涼みに訪れている公園のようである。橋の上部が直線に対し、下部がきれいな曲線を描いている構造は、両国橋にも通じる特徴的な姿である。

謝辞

本展の開催にあたり、ご協力を賜りました下記の関係各位、関係各機関の皆様に深く感謝の意を表します。

・千代田区教育委員会

・千代田区立日比谷図書文化館

・津山郷土博物館

(敬称略、五十音順)

江戸東京博物館館外展示

隅田川 ―江戸時代の都市風景

Edo-Tokyo Museum Exhibition outside
“Sumidagawa River - Edo period urban landscape”

編集・発行 東京都江戸東京博物館

担 当 江戸東京博物館学芸員 朴 美姫
江戸東京博物館学芸員 岩崎 茜

デザイン 株式会社 オーバル

©Edo-Tokyo-Museum

